

現代青年の友人関係に及ぼす要因

泉水清志*・小池庸生*

Factors on Friendship of Modern Young People

Kiyoshi Sensui and Nobuo Koike

Abstract

The purpose of this study was to examine factors on friendships of modern young people by measuring characteristics, motivations, and satisfactions of friendships, love for someone of the opposite sex and liking for close friends, and attitudes towards their own country and others of women's junior college students. Results showed that the characteristics involve both heartlessness and intimacy, that the motivations were self-decisional and had to do with prosocial behavior, that satisfactions were influenced by superficial and selective friendships, that liking was stronger than love, and that relationships with other countries were thought holistically, positively, and affirmatively by the junior college students.

Keywords: friendship, modern young people, motivation, inter-culture

キーワード: 友人関係, 現代青年, 動機づけ, 異文化

1. 問題

1) 青年期の友人関係の特徴

青年期は、対人能力や性格、情緒など、自己の内面的属性に関心が向くようになり、自己に対する内省が高まるとともに、深い友人関係をもつことで新たな自己概念を獲得するといわれてきた。青年期における「自己概念の獲得」と「親密な友人関係」には密接な関わりがあり、同性の親友像が自分自身の自己像のモデルとなることによって、また現実の自己像と理想の自己像を獲得してそれらと比較することによって、自己評価を行うといわれている(岡田, 1999)。

友人に対する好意を理解するものとして、Rubin (1970) の「恋愛・好意尺度」がある。彼は、対人魅力の質的な差に注目し、「恋愛」と「好意」が異なるものであるという考えから、それらを区別するための恋愛尺度と好意尺度を作成した。前者は、相手への「親和・依存欲求」「援助傾向」「排他性と熱中」の3要素で構成されているのに対し、後者は相手への「評価」と「尊敬」から構成されている。彼は、恋人に対しては恋愛と好意の両方が高いが、友人に対しては好意のみが高いことを示している。このことから、友人との親密性がすすみ、いわゆる「親友」といわれる関係になると、好意だけでなく、恋愛の傾向も表れるようになる

* 育英短期大学現代コミュニケーション学科

と考えられる。

友人関係は青年の社会化に影響を及ぼし、その機能として「安定化」「社会的スキルの学習」「モデル」があるといわれている（松井，1990）。「安定化」とは、悩んだときに話や相談を聞いてくれる友人の存在が精神的安定をもたらす、自我を支える機能である。「社会的スキルの学習」とは、友人との付き合い方を通して他者と良い関係を構築するための接し方を学習する機能である。「モデル」とは、友人から新しい考え方や生き方を学ぶことによって自己の人生観や価値観を広げ、尊敬や憧れから友人をモデルとする機能である。また、親しい友人とは「安心」を中心とした信頼関係を形成して自分の人生に欠かせないものであると感じ、自己の自律を支え、アイデンティティの達成を促進するとされている（水野，2004）。

友人関係の満足感は、ストレスコーピングと関連するといわれている（加藤，2001）。人間関係で生じたストレスフルな出来事に対し、「ポジティブ関係コーピング（その関係を積極的に改善してよりよい関係を築こうと努力する）」と「解決先送りコーピング（その関係を問題とせず、無視するような行動をする）」は友人関係の満足感にポジティブな影響を及ぼすのに対し、「ネガティブ関係コーピング（その関係を放棄、崩壊するような行動をする）」はネガティブな影響を及ぼすとされている。

青年期の友人関係には、発達的な変化がみられる。同性の友人とは、年齢が進むにつれて自己開示して積極的に相互理解しようとする傾向が強まり、多くの他者との同調傾向は減少していく。また、青年期初期には同性の友人と「浅く広い」関係が多くみられるが、年齢が進むにつれてその傾向は弱まり、「深く広い」関係から「深く狭い」関係へと移行していく。一方、その関係には性差がみられ、男子は友人と自分は異なる存在であるという認識をもち、自己の内面を同性の友人に表出せず、心理的距離のある互いに分離した関係をも

つものに対し、女子は相手を理解し、共感して共鳴し合うといった友人と1つになるような関係を望み、互いの個性についての自覚が薄く、同性の友人と密着した関係をもつ。

岡田（2005）は、友人関係への動機づけを自己決定理論の枠組みから検討し、友人関係が報酬や罰、他者からの働きかけといった外的な動機づけではなく、興味や楽しさなど個人のポジティブな感情に動機づけられ、自発的に行動されるという自己決定的なものであるほど、友人への向社会的行動の生起頻度が高くなることを明らかにした。この傾向は女性よりも男性に強くみられるとし、女性は動機づけが自己決定的であるかどうかにかかわらず、一般的に友人に対して多くの働きかけを行うのに対し、男性は活動を共有することを目的とした関わりが中心であるため、相手への興味や重要性など「同一化」による動機づけが向社会的行動には必要であることを、その理由としてあげている。

国際化や多文化共生がすすむ現代では、異文化と友好的に共生することや異文化を受容することが重要な課題であり、国際化が進んだ環境に居住することは異文化受容態度（異文化や外国人に好意的であり、積極的に関わりようとする態度）を促進するとされている（渡部・金児，2004）。青年期において、その発達課題でもある自己アイデンティティ獲得を目指していく中で、異文化に接触し、自分自身の国籍や人種に基づく社会的アイデンティティを獲得することは、親密な友人関係の形成や維持に影響するといえよう。また、友人関係のプロセスにはコミュニケーションが大きな役割を果たしており、異文化とのコミュニケーションを経験することが相手との直接的な関係を決定するだけでなく、他の友人との関係にも影響を及ぼすと推測される。

2) 現代青年の友人関係

現代において、青年の友人関係は「希薄化」や

「表面化」といった特徴があると指摘されている。

人間関係の開始や維持、進展には「自己開示」が大きな役割を果たしている。関係が深まるとともに開示する情報の量は多くなり、そのレベルは深くなっていく。また、一方が自己開示することによって、もう一方はそれと同じ量、レベルの自己開示を行わなければならない「自己開示の返報性」が存在し、友人をはじめとする人間関係の発展に関連するとされている。しかし、現代の青年は自分自身の内面を開示するような関わり方を避け、表面的な楽しさの中で群れて関係の深まりを避ける傾向にあるとされ、岡田（1995）は大学生の友人関係の特徴として、「群れ（楽しさを追求し群れる）」「気遣い（互いに傷つけあわないように群れる）」「ふれあい回避（互いの領域に踏み込まないように関係の深まりを回避する）」の3因子を見出した。

しかし、現代青年の友人関係が全体的に「希薄化」しているのではなく、場面に応じて選択的に使い分けられているという指摘もされている（福重，2007）。つまり、「友人との関係はあっさりしてお互いに深入りしない」といった表面的な関わり行動の一面と、「意見が合わなかったときには納得がいくまで話し合いをする」といった積極的な関わり行動の一面があるように、友人関係の中に「希薄」なものや「親密」なものや混在しているのである。これは、現代においては友人関係の深さと自己開示の深さがあまり関連しなくなっていることを示しており、現代では他者と出会い、関係を維持する機会が多様になったために、以前では含まれなかったさまざまな関係が「友人」というカテゴリーに含まれるようになったことや、その関係の質的差異やその場の文脈によってつきあい方を選択的に使い分けるようになっていることが、その理由としてあげられている（福重，2007；辻，1999）。

3) 本研究の目的

以上のことから、青年期の友人関係やその動機づけ、満足感は自己概念や自己アイデンティティ、その社会化に影響していることが明らかである。また、現代青年は表面的な友人関係を求める一方で、他者との接触が増加したため、友人関係の「希薄」と「親密」の使い分けを求められるようになってきている。さらに、他文化共生が求められる現代において、青年の異文化受容態度がその友人関係に影響を及ぼしていると考えられる。

本研究は、友人関係の特徴、友人関係への動機づけ、友人関係の満足感、親友に対する好意尺度と恋愛尺度傾向、自国と外国への態度について調査し、現代青年の友人関係の特徴と影響について検討することを目的とした。

2. 方法

1) 調査対象者：女子短大生365名(平均年齢18.5歳)

2) 調査内容・項目：以下の(1)~(5)について、「非常にあてはまる(5)」から「全くあてはまらない(1)」まで、5件法で回答を求めた。

(1) 友人関係尺度（岡田，1999）17項目

(2) 友人関係への動機づけ尺度（岡田，2005）16項目

(3) 友人満足感尺度（加藤，2001）6項目

(4) 親友に対する態度（好意・恋愛尺度：Rubin，1970）各13項目

(5) 自国と外国への態度尺度（向井ら，2005）25項目

なお、フェイス・シート項目として、所属学科、学年、年齢、性別についても回答させた。

3) 調査時期：2010年7月中旬および10月初旬に実施した。

3. 結果

1) 友人関係の特徴

表1は友人関係の特徴について、3つの下位尺度（「気遣い」「ふれあい回避」「群れ」）ごとに平均値と標準偏差（SD）をまとめたものである。

全体の平均値は3.56、SDが0.88であり、平均値が1/2 SD以上（4.00）の項目は、「1. 相手の考えていることに気を使う」「3. 冗談を言って相手を笑わせる」「4. 互いに傷つけないように気を使う」「9. 楽しい雰囲気になるように気を使う」であった。これに対し、平均値が1/2 SD（3.11）以下の項目は、「14. 真剣な議論をすることがある」「16. 友だちグループのためにならないことは決してしない」「17. 心を打ち明ける」であった。また、下位尺度においては「ふれあい回避」の平均

値が1/2 SD以下であり、低い傾向を示すことが明らかとなった。

2) 友人関係への動機づけ

表2は友人関係への動機づけについて、4つの下位尺度（「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」）ごとに平均値と標準偏差（SD）をまとめたものである。

全体の平均値は3.85、SDが0.86であり、平均値が1/2 SD以上（4.28）の項目は、「4. 友人と一緒にいるのは、楽しい」「6. 友人とは親しくしておくべきである」「7. 友人関係は、自分にとって意味のあるものである」「8. 友人と親しくなるのは、うれしい」「11. 友人といることで、幸せになる」「12. 友人と話すのは、おもしろい」「15. 友人と一緒に時間を過ごすのは、重要なことである」

表1 友人関係の特徴

項 目	平均	SD
1. 相手の考えていることに気を使う。	4.17	0.69
4. 互いに傷つけないように気を使う。	4.00	0.77
7. 自分を犠牲にしても相手につくす。	3.20	0.89
10. お互いの約束は決してやぶらない。	3.87	0.80
13. 友だちグループのメンバーからどう見られているかが気になる。	3.44	1.12
16. 友だちグループのためにならないことは決してしない。	3.02	0.82
〔気遣い〕	3.62	0.85
2. お互いのプライバシーには入らない。	3.29	0.86
5. お互いの領分にふみこまない。	3.41	0.80
8. 相手に甘えすぎない。	3.32	0.97
11. 相手の言うことに口をはさまない。	3.14	0.86
14. 真剣な議論をすることがある。(●)	2.71	1.06
17. 心を打ち明ける。(●)	2.39	0.96
〔ふれあい回避〕	3.04	0.92
3. 冗談を言って相手を笑わせる。	4.01	0.79
6. ウケるようなことをよくする。	3.56	0.97
9. 楽しい雰囲気になるように気を使う。	4.01	0.77
12. 1人の友だちと特別親しくするよりは、グループで仲良くする。	3.29	0.97
15. みんなで一緒にいることが多い。	3.85	0.86
〔群れ〕	3.75	0.87
平均	3.45	0.88

表2 友人関係の動機づけ

項 目	平均	SD
1. 親しくしていないと、友人ががっかりする。	2.70	0.90
5. 友人関係を作って置くように、周りから言われる。	2.67	1.23
9. 一緒にいないと、友人が怒る。	2.07	0.95
13. 友人のほうから話しかけてくる。	3.92	0.81
〔外 的〕	2.84	0.97
2. 友人がいないと、後で困る。	3.70	1.00
6. 友人とは親しくしておくべきである。	4.30	0.80
10. 友人がいないのは、恥ずかしい。	2.91	1.10
14. 友人がいないと、不安である。	3.72	1.09
〔取り入れ〕	3.66	1.00
3. 友人のことをよく知るのには、価値のあることである。	3.92	0.93
7. 友人関係は、自分にとって意味のあるものである。	4.58	0.65
11. 友人といることで、幸せになる。	4.28	0.85
15. 友人と一緒に時間を過ごすのは、重要なことである。	4.43	0.72
〔同一化〕	4.30	0.79
4. 友人と一緒にいるのは、楽しい。	4.59	0.69
8. 友人と親しくなるのは、うれしい。	4.64	0.69
12. 友人と話すのは、おもしろい。	4.56	0.68
16. 友人と一緒にいると、楽しい時間が多い。	4.54	0.72
〔内 発〕	4.58	0.69
平 均	3.85	0.86

表3 友人関係への満足感

項 目	平均	SD
1. 周囲の人たちに受け入れられていると感じる。	3.79	0.79
2. 私は、友だちととても気持ちが通じ合っている。	3.65	0.76
3. 自分を本当に理解してくれる人がいる。	4.17	0.95
4. 心から親友と呼べる人がいる。	4.30	0.95
5. 誰からも好かれていると感じる。	2.71	0.82
6. 自分を支持してくれる人がいる。	3.56	0.83
平 均	3.70	0.85

「16. 友人と一緒にいると、楽しい時間が多い」であった。これに対し、平均値が1/2 SD (3.42) 以下の項目は、「1. 親しくしていないと、友人ががっかりする」「5. 友人関係を作って置くように、周りから言われる」「9. 一緒にいないと、友人が怒る」「10. 友人がいないのは、恥ずかしい」であった。また、下位尺度においては「内発」と「同一

化」の平均値が1/2 SD以上であり、高い傾向を示すのに対し、「外的」の平均値は1/2 SD以下であり、低い傾向を示すことが明らかとなった。

3) 友人関係への満足感

表3は友人関係への満足感について、平均値と標準偏差 (SD) をまとめたものである。

全体の平均値は3.70、SDが0.85であり、平均値が1/2 SD以上(4.13)の項目は、「3. 自分を本当に理解してくれる人がいる」「4. 心から親友と呼べる人がいる」であった。これに対し、平均値が1/2 SD(3.27)以下の項目は、「5. 誰からも好かれていると感じる」であった。

4) 親友に対する態度

表4は親友に対する態度について、恋愛尺度と

好意尺度ごとに平均値と標準偏差(SD)をまとめたものである。

恋愛尺度は、平均値が3.33、SDが0.98であり、平均値が1/2 SD(3.82)以上の項目は、「1. もし、Aさんが元気がなさそうだったら、私が真っ先に励ましてあげたい」「3. すべてのことがらについて、私はAさんを信頼できるという気がする」「23. Aさんから信頼されると、とてもうれしく思う」であった。これに対し、平均値が1/2 SD

表4 親友に対する態度

項 目	平均	SD
1. もし、Aさんが元気がなさそうだったら、私が真っ先に励ましてあげたい。	4.37	0.78
3. すべてのことがらについて、私はAさんを信頼できるという気がする。	3.95	0.90
5. Aさんに欠点があっても、それを気にしないでいられる。	3.82	0.96
7. Aさんのためなら、ほとんど何でもしてあげるつもりだ。	3.55	0.91
9. Aさんをひとり占めしたいと思う。	2.47	1.12
11. Aさんと一緒にいられなければ、私はひどく寂しくなる。	2.95	1.07
13. 私は1人でいると、ついAさんに会いたいと思う。	3.26	1.12
15. Aさんが幸せになることが、私の最大の関心である。	3.48	0.99
17. Aさんのことなら、どんなことでも許せる。	2.80	0.97
19. 私は、Aさんを幸せにすることに責任を感じている。	2.49	0.92
21. Aさんと一緒にいると、相手の顔を見つめていることが多い。	2.73	1.03
23. Aさんから信頼されると、とてもうれしく思う。	4.20	0.80
25. Aさんなしに過ごすことは、つらいことだ。	3.18	1.18
〔恋愛尺度〕	3.33	0.98
2. 私は、Aさんと一緒にいるとき、ほとんど同じ気分になる。	3.83	0.91
4. Aさんは、とても適応力のある人だと思う。	3.86	0.86
6. Aさんは、責任ある仕事に推薦できる人物だと思う。	3.67	0.98
8. 私は、Aさんをとてもよくできた人だと思う。	3.69	0.84
10. Aさんの判断の良さには、全面的信頼を置いている。	3.46	0.88
12. Aさんと知り合いになれば、すぐにAさんを好きになると思う。	3.72	0.91
14. Aさんと私は、お互いにとてもよく似ていると思う。	3.65	1.09
16. クラスやグループで選挙があれば、私はAさんに投票するつもりだ。	3.20	1.02
18. Aさんは、みんなから尊敬されるような人物だと思う。	3.37	0.89
20. Aさんはとても知的な人だと思う。	3.20	0.99
22. Aさんは、私の知り合いの中で最も好ましい人物だと思う。	3.83	0.87
24. 私はAさんのような人物になりたいと思う。	3.38	0.96
26. Aさんは賞賛的になりやすい人物だと思う。	3.15	0.85
〔好意尺度〕	3.54	0.93
平均	3.43	0.95

(2.84)以下の項目は、「9. Aさんをひとり占めたいと思う」「17. Aさんのことなら、どんなことでも許せる」「19. 私は、Aさんを幸せにすることに責任を感じている」「21. Aさんと一緒にいると、相手の顔を見つめていることが多い。」であった。

一方、好意尺度は平均値が3.54、SDが0.93であったが、平均値が1/2 SD以上(4.00)の項目も1/2 SD以下(3.08)の項目もなく、全体的に平均値付近にその回答が集まっていることが分かった。

5) 日本と外国に対する態度

表5は日本と外国に対する態度について、平均値と標準偏差(SD)をまとめたものである。

全体の平均値は3.49、SDが0.88であり、平均値が1/2 SD以上(3.93)の項目は、「8. もっと日本人はいろいろな部分で外国の人を受け入れていかなければならない」「12. 日本の文化と外国の文化の両方を同じように尊重していかなければなら

表5 日本と外国に対する態度

項 目	平均	SD
1. 日本は世界で一番良い国である。	3.16	1.00
2. 日本の利益にならなくても、苦しんでいる国々にはすすんで富を分けるべきだ。	3.94	0.81
3. 異なる民族の人びとともっと深く付き合いたい。	3.72	0.97
4. 海外援助をするなら、日本の利益にならないような援助はすべきではない。	2.39	0.89
5. もし引っ越すなら、他の条件がよくても外国の人がたくさん住んでいるような地域は避けたい。	2.91	1.00
6. 日本の経済力を考えれば、外国に対して日本はもっと強く発言してもよい。	3.26	0.85
7. 長く日本に住んでいても、外国の人には日本人と同じ権利がないのは仕方がない。	2.61	0.95
8. もっと日本人はいろいろな部分で外国の人を受け入れていかなければならない。	4.00	0.76
9. 他の民族の文化をもっとよく知りたい。	3.83	1.00
10. 生まれ変わるとしたら、また日本人に生まれたい。	3.89	1.17
11. 日本が戦後驚くほどの経済成長をとげたのは、国民が優秀だからだ。	3.16	0.83
12. 日本の文化と外国の文化の両方を同じように尊重していかなければならない。	4.06	0.77
13. 外国の人とは、文化が違ってはじめは分かり合えなくても、あきらめずに分かり合えるまで努力したい。	3.93	0.82
14. 日本の会社では、外国の人を管理職にしないほうがうまくいくと思う。	2.95	0.76
15. 私は、日本という国が好きだ。	4.20	0.86
16. 世界の貧しい国の生活を良くするために、私たちの生活を切りつめようとは思わない。	3.16	0.81
17. 外国の人と付き合いと視野が広がるのでよいと思う。	4.05	0.83
18. 日本は諸外国から学ぶことが多い。	3.96	0.79
19. 私は日本人であることを誇りに思う。	3.86	0.86
20. 外国の人が日本で働く場合には、特定の職種に限定するほうがよい。	2.65	0.88
21. 異なる民族の友人がたくさんほしい。	3.60	0.99
22. 外国の文化を積極的に取り入れることは、日本にとって良いことである。	3.98	0.77
23. 外国の人の住む地域を限定したほうが、社会の秩序を保てると思う。	2.75	0.89
24. 日本人は優れた民族である。	3.45	0.85
25. 物価の安い外国で暮らすより、少々高くても日本に暮らしたい。	3.67	0.95
平均	3.49	0.88

ない」「15. 私は、日本という国が好きだ」「17. 外国の人と付き合うと視野が広がるのでよいと思う」であった。これに対し、平均値が1/2 SD(3.05)以下の項目は、「4. 海外援助をするなら、日本の利益にならないような援助はすべきではない」「5. もし引越すなら、他の条件がよくても外国の人がたくさん住んでいるような地域は避けたい」「7. 長く日本に住んでいても、外国の人には日本人と同じ権利がないのは仕方がない」「20. 外国の人が日本で働く場合には、特定の職種に限定するほうがよい」「23. 外国の人の住む地域を限定したほうが、社会の秩序を保てると思う」であった。

4. 考 察

1) 友人関係の特徴

友人関係の特徴では、「相手に気を使う」「傷つけないようにする」といった「気遣い」や、「冗談を言って笑わせる」「楽しくなるように気を使う」といった「群れ」の傾向があることが明らかとなり、現代青年の友人関係の特徴とされている傾向が確認された。しかし、「真剣に話し合う」「心を打ち明ける」といった「ふれあい回避」の傾向は低いことが明らかとなった。このことは、現代青年の友人関係は全体的に希薄化しているのではなく、「希薄」と「親密」が混在していることを示すものであるといえよう。表1の「ふれあい回避」尺度の項目別平均をみると、「プライバシーには入らない」「お互いの領分に踏み込まない」「相手に甘えすぎない」が比較的高く、「相手の言うことに口をはさまない」「真剣な議論をする」「心を打ち明ける」が比較的低いことが分かる。これは、友人に対して内面の深い部分には入らないようにしながらも、自分の意見や考えは相手に伝えようとしていることを表しているのではないか。このことは、「気遣い」の中の「友だちのためにならないことはしない」が低いことから推測されるで

あろう。

2) 友人関係への動機づけ

友人関係への動機づけでは、「一緒にいるのが楽しい」「親しくなるのがうれしい」などの「内発」や、「意味のあるものである」「重要なことである」などの「同一化」が高いことが明らかとなった。このことは、友人関係は高い自己決定性をもつものであり、ポジティブな感情から動機づけられる「内発」や、価値を認めて自発的に動機づけられる「同一化」から生じるものであると考えられる。友人関係が自己決定的な動機づけから生じることは、「周りから言われる」「友人が怒る」などの「外的」が低いことから明らかであろう。

この自己決定的な動機づけは向社会的行動と関連するとされており(岡田, 2005)、現代の青年は友人への適応的な働きかけによって、親密な関係を形成しているといわれている。しかし、この動機づけが向社会的行動に及ぼす影響は男性において特にみられ、その中でも「同一化」が影響するとされていたが、本研究の対象者は女性であるにもかかわらず、「同一化」が友人関係への動機づけに強く働いていることが示された。男性は友人と活動を共有する関わり行動をするため、相手に対する興味や重要性から向社会的行動が生起するとされているが、女性も普段の生活の中で友人と多くの活動を共有することにより、「同一化」による友人関係への動機づけが生じ、向社会的行動が生起する可能性があると考えられる。このことは、性別に限らず、活動を共有させて相手に対する興味や重要性を高め、向社会的行動を生起させることが、親密な友人関係につながることを示唆しているといえよう。

3) 友人関係への満足感

友人関係への満足感では、「自分を理解してくれている」「親友と呼べる」友人から高い満足感を得ており、現代の青年は今の友人の存在自体に満足

していることが考えられる。これに対し、自分が「誰からも好かれている」とは感じておらず、自分が友人全員からは好意的に思われていないと感じていることも推測された。青年期においては、自己アイデンティティの獲得が課題であるとされているが、その獲得過程で自尊心や自己評価の低下、自信の喪失が生じるため、それが友人関係への満足感にも影響したのではないか。また、現代青年の友人関係は「表面的」で「選択的」に行われており(岡田, 1995; 辻, 1999)、自分が友人から「表面的」で「選択的」に関係をもたれていると実感していることが、「誰からも好かれている」という認知に結びつかなかったとも考えられる。

4) 親友に対する態度

親友に対する恋愛尺度では、「励ましてあげたい」「信頼されると嬉しい」などが高く、「独り占めしたい」「幸せにすることの責任を感じる」などが低いことが明らかとなった。このことから、親友に対して、相手自身の状況については大切に考えているが、自分との関係となると意外と冷静な判断が行われているように思われる。

親友に対する好意尺度では、すべての項目が平均値付近に集まっていることが明らかとなった。しかし、表4の項目別平均より、「一緒にいるときに同じ気分になる」「適応力のある人だと思う」などは比較的高く、「選挙で投票するつもりだ」「賞賛的になりやすい人だと思う」などは比較的低いことが分かる。これは、親友は相手と自分の関係で参考になる人であると考えているが、第三者との関わりの中ではあまり評価をしていないと思われる。

好意尺度と恋愛尺度の比較では、好意尺度の方が高いことが明らかとなり、Rubin (1970) を支持する結果となったが、大きな差はみられなかった。本研究の対象者である青年期女性は、同性でもある親友に対して恋愛的な感情と好意的な感情をほぼ等しくもっているが、好意的な感情をやや高く

もっているのではないだろうか。この点は、青年期男性のデータと比較検討してみることが必要かもしれない。

5) 日本と外国に対する態度

日本と外国に対する態度では、「日本と外国の両方の文化を同じように尊重していかなければならない」「日本という国が好きだ」「外国の人と付き合うと視野が広がるのでよい」などが高いことが明らかとなった。このことから、積極的に外国との関係を進めていこうとする姿勢があると同時に、愛国心も表れていることが考えられる。多文化共生が求められる今後の社会において、とても良い方向性を示しているのではないか。このことは、「日本の利益にならないような援助はすべきではない」「外国人に日本人と同じ権利がないのは仕方がない」「外国人は特定の職種に限定する方がよい」などが低いことから同様のことがいえよう。これは、現代の青年が外国との関係を考える上で限定的ではなく全体的にとらえ、あらゆる面での交流を考えていることの表れでもあると思われる。政治的な判断や経済的な判断を考えた場合、問題のある回答もあるが、外国との関係をより積極的かつ肯定的な方向で進めていくことを現代の青年は目指しているのではないだろうか。このような態度は、他者とのコミュニケーションを促進し、肯定的かつ積極的な態度に結びつくことが推測されるため、青年の友人関係にもポジティブな影響を及ぼすことが推測される。

これらの態度の形成過程について、たとえば現代の社会的な傾向によるものなのか、地域環境的な要因によるものなのかを今後さらに検討することが必要であろう。

5. 全体的考察

本研究は、友人関係の特徴、友人関係への動機づけ、友人関係の満足感、親友に対する好意尺度

と恋愛尺度傾向、自国と外国への態度について調査し、現代青年の友人関係の特徴と影響について検討することを目的とした。

その結果、現代青年の友人関係の特徴として、「気遣い」や「群れ」の傾向がみられたが、「ふれあい回避」の傾向はみられず、相手の内面の深い部分には入らないようにする一方で、自分の意見や考えは相手に伝えようとしていることが推測され、友人関係において「希薄」と「親密」が混在していることが考えられた。

現代青年の友人関係の動機づけは、「内発」や「同一化」といった自己決定的なものから生じていることが明らかとなり、それが友人への向社会的行動にもつながり、さらに親密な関係を形成していくことが考えられた。また、男子においては「同一化」が向社会的行動に影響するとされていたが、普段の生活で友人と活動を共有することによって女子でもその影響がみられることが示唆された。

現代青年の友人関係の満足感は、現在の友人には満足しているが、自分は友人全員から好意的に思われていないと感じており、現在の自分に対する自信のなさや、友人からの「表面的」で「選択的」な関係を実感していることが影響していると考えられた。

現代青年の親友に対する態度は、相手の状況を大切に考える一方で自分との関係となると冷静な判断を下し、両者の関係では参考になるが、第三者との関わりでは高く評価していないことが推測された。

現代青年の日本と外国に対する態度は、愛国心が高いだけでなく、外国との関係を全体的、積極的、肯定的にとらえようとしていることが推測され、この態度が友人関係にもポジティブな影響を及ぼすと思われた。

今後の課題として、本研究で調査した内容をさ

らに詳細に検討することがあげられる。下位尺度ごとの検討や尺度相互の関連性についても検討することは、時代が急激に変化する現代における青年の特徴を把握するためには有効であろう。また、今後すすんでいく多文化共生時代を考えた場合、異文化受容態度の高さが友人関係やその選好に及ぼす影響を検討することも重要である。この場合、その態度形成に及ぼす要因（地域、環境など）などから検討することが必要であろう。

引用文献

- 福重 清 (2007). 『変わりゆく「親しさ」と「友だち」—現代の若者の人間関係—』高橋勇悦他(編)「現代日本の人間関係 団塊ジュニアからのアプローチ」学文社 pp. 27-61.
- 加藤 司 (2001). 『対人ストレス過程の検証』教育心理学研究, 49, pp.295-304.
- 松井 豊 (1990). 『友人関係の機能』齋藤耕二・菊池章夫(編)「社会化の心理学ハンドブック」川島書店 pp. 283-296.
- 水野将樹 (2004). 『青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか—グランデッド・セオリーアプローチによる仮説モデルの生成—』教育心理学研究, 52, pp.170-185.
- 向井有理子・渡部美穂子 (2003). 『異文化受容態度：日・独・英の比較』向井有理子・渡部美穂子(編)「比較文化研究—日本・ドイツ・イギリス—」都市文化研究センター
- 岡田 涼 (2005). 『友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論の枠組みから—』パーソナリティ研究, 14, pp.101-112.
- 岡田 努 (1995). 『現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察』教育心理学研究, 43, pp.354-353.
- 岡田 努 (1999). 『現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について』教育心理学研究, 47, pp.432-439.
- Rubin, Z (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, pp. 265-273.
- 辻 大介 (1999). 『若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア』橋元良明・船津衛(編)「子ども・青少年とコミュニケーション」北樹出版, pp.11-27.
- 渡部美穂子・金児暁嗣 (2004). 『都市は人の心と社会を疲弊させるか?』都市文化研究, 3, pp.97-117.

〔 2010年11月30日 受付 〕
〔 2011年1月6日 受理 〕